

書評と紹介

菊池勇夫著『飢えと食の日本史』

胡桃沢 勘 司

本書は、飢饉について、日本史研究者の立場から、広く一般読者に向けて書かれたもので、章立ては左記のとおりである。

- 序章 今、なぜ飢饉か
 - 第一章 日本列島の飢饉史
 - 第二章 飢饉のなかの民衆
 - 第三章 凶作・飢饉のメカニズム
 - 第四章 飢饉回避の社会システム
 - 第五章 飢饉の歴史と現代
- あとがき
- 補 論

菊池氏（以下「著者」と記す）は、「あとがき」に、「この本では、日本列島における飢饉の時代相を概観したうえで、江戸時代を中心に、飢饉とはどのような状況だったのか、飢饉はどのようなしくみのなかで発生していたのか、飢饉を未然に防ぐための方策がどのようなに取り組みられてきたのか、私の理解するところを説明し、最後に現代との関わりで飢饉の歴史から何を読み取るべきか述べてみた。」と記している。著者の解説と章立てを併せ見ることにより、本書のおおよその内容は理解出来るのである。

そのうえで、胡桃沢（以下「紹介者」と記す）が、本書をより具体的に紹介

したいと思ったのは、分かりやすく書かれた文章から、多くを学ぶことが出来たからである。紹介者は、飢饉の歴史、およびその研究史については、何の知識も無いが、そのような者にも凄味を感じさせるところに、本書の価値が有ることを、まずは言っておこう。学んだことは多岐にわたり、本来その全てを採り上げるべきところではあるが、紹介者の学力の限界から、ごく一部に絞って紹介を試みることをお許しいただきたい。

第一章では、食料を、狩猟採集で得ていた時代は低かった飢饉の危険度が、農耕に依存する時代になると、自然災害による不作のため却って高くなると、説かれている。食料を自然界からの恵みに求めていた時代は、自分が食べるものは自ら確保しなければならぬから、人口増加は限られる。一方、農耕が行われるようになると、生産性の大きさから、直接生産に従事しない人間をも養うことが可能となつて、人口は増えてゆく。自然災害が発生した場合、人口が多いほうが、食料不足の度合いが厳しくなつて、飢饉が発生するといっているのである。この指摘に対しては、「話が逆ではないか」との声が挙がるかもしれない。ただ、紹介者は、著者が、食料獲得の手段としては、狩猟採集より農耕のほうが安定性が高いことに基つき、不測の事態は技術レベルが低いところで起きるとする通念に、再考を迫っていると、受け止めている。飢饉が如何なる食料獲得環境で起きるかのイメージを、我々は修正しなければならないのかもしれない。著者が描くメカニズムを学ぶ時、技術革新⇨生産性向上を目指すのは、人類の宿命と知りつつも、そこには常に危険が潜むことを、認識しなければなら

ないと思うのは、多分紹介者だけではないだろう。

第一章で予告がなされ、第三章で詳述される著者の見解は、農耕を基本とする時代、飢饉が専ら自然災害に基づくのは一五世紀までで、それ以降は、徐々に人災としての色彩を強くしてゆく、というものである。該当の人の営みは市場経済の展開だが、室町時代になると、貨幣経済の進展に伴い、農村と都市をつなぐ生産と流通が拡大し、幕府が置かれた京都に富が集積するようになる。都市に経済力が集中するとの現象は、時代を追って拡大し、江戸時代には、幕藩体制の下で、藩庁・三都経済が成立して、食料の調達・供給は、全国市場の原理に基づき、行われるようになるのである。生産は農村で行われるが、領主は、支配地の収穫物を年貢として徴収し、藩庁が在る都市に集積するほか、江戸や大坂に送って金に換え、藩の財源とした。領主たちにとって、藩運営に要する莫大な費用を賄うには、支配地を越えた全国レベルでの貨幣獲得活動が必要だったのである。一方、多くの人口を抱える三都は、多量の食料供給を必要としていたから、大金を用意して送り込みを待ち受けた。この、人が築いた構造が、とりわけ農村に、悲惨な事態をもたらすことになるのである。著者が、誕生以来人生の大半を過ごしている東北地方は、この現象が最も激しく起きた地域であった。市場経済となっても、飢饉発生のかっけは凶作だが、年貢徴収を行う藩が、備えとしての備荒貯蓄を十分整えていれば、飢饉の激化を防ぐことは出来る。しかし、備荒貯蓄が不十分なうえ、農民の前年の収穫物が底をついたところを凶作に襲われれば、極端な食料不足を招き、多くの犠牲者を出してしまう事態となるのである。東北諸藩が備荒貯蓄を堅実に進めていけば、餓死者の激増を防ぐことは出来たと思われるが、支配者たちはそれをしなかった。貯穀しておくよりは売って、利益を得るほうが、藩財政にとって有効だと考えていた。端境期までに、前年産の穀物のほとんどを江戸や大坂に送ってし

まい、在庫を持つとしなかった。市場経済の進展の前で、あまりにも無防備になりすぎていたのである。生産地の危機的状況を救うため、供給を受けた所が調達先へ返送するのは一法だが、幕府は直轄都市の食料確保を優先させていた。すなわち、列島全体には飢えを凌げる穀物量が有っても偏在し、防ぐことが出来なかつた飢饉は人災だと、著者は訴えるのである。

第一章の最後で、著者は、明治維新後は、東北地方が大凶作に見舞われることはあつたが、多数の餓死者を出すことは無くなつたと述べ、人的被害減少の基本的要因は飢饉対策のレベルの変化にあつたと見ている。対策は、江戸時代は各藩ごとに取られていたが、明治政府は国家として、これを行った。鉄道敷設が進展して輸送力確保が安定してくると、食料事情に余裕が有る所から無い所へ送ることが容易となつて、特定地域が危機的状況に陥るのを防ぐことが出来るようになったのである。開国した結果として、外国から食料を緊急輸入出来るようになったことも、被害を少なくすることに繋がつた。著者は、日本は、明治維新以降、江戸時代以前に比べ、はるかに飢饉に打たれ強くなつたと、指摘するのである。この史実を知つた時、紹介者は、近年大災害発生のにびに、全国各地から被災地へ、ボランティアの人々が駆けつけるのを想起した。日本人という意識は明治以降に形成されたと言われるが、列島に住む者同士はお互い様との心持ちは、あるいは、飢饉対策は国としてということが、原点となつているのかもしれない。

明治以降の改善は評価されるべきことではあるが、近代化の名の下に伝統的社会の解体が進行し、農業の衰退につながつてゆくことを、著者は見逃さない。序章で「日本人が農耕民族であるという意識は希薄になつてしまつた」と指摘したうえで、第五章では「最近の江戸時代の研究では農村史・農民史は主要なテーマではなくなつてしまつた」と、述べている。総じて、日本人の目に

農民の姿が見えなくなりつつあることが、農業＝食料生産への軽視に繋がっているのではないかと、危惧しているのである。農業の衰退にも関わらず、外国からの輸入によって、現代日本では食料の確保が出来ているが、結果として食料の自給率は下がり続けている。もしも外国からの食料補給が断られたら、我々は、たちまち食料不足に陥ってしまうだろう。現代の食料の国際市場化は、江戸時代の全国市場化と、状況に通底するものが有るというのが、著者の年来の考え方である。国際構造のなかで飢饉の再来を防ぐには、農業に再び関心が向けられるよう、価値意識の転換＝文化革命が欠かせないとの提案が示される。それに際しては、江戸時代の米沢藩主上杉鷹山の「産業経済の原点はモノ作り」の思想に、耳を傾けてみることを説いているのである。

現在の日本の食料獲得は、地球規模での農業技術の進化と市場経済の展開に、かなりの部分を依存している。しかし、これは、日本に今後食料危機を招かない保障になるものではないことを、著者は歴史的経験を通じて国民に訴えかけているのである。

本書は、二〇〇〇年に刊行された原本の復刊である。著者は、二十年前に、一般読者に向けて情報発信をしたのだが、日本の食料確保状況は、当時より、むしろ悪化しているとの印象を、紹介者は抱いている。これが、多少なりとも改善の方向に向かうようにとの願いを込め、敢えて紹介を試みた。

(東京 吉川弘文館 二〇一九年 一八六頁 二二〇〇円＋税 ISBN978-4-642-07104-8)

付記

個人的には、本書の記述で最も印象に残ったのは、序章の最後に「かつては

生々しく飢饉生活、飢饉伝承を語る古老のひとりやふたりは村にいたものだが」と、書かれていることである。紹介者の岳父（一九三三～二〇二二）は、宮城県北部の農村の出身で、小学生の時に昭和の凶作を経験している世代だが、この時子供たちが受けた影響を次のように語っている。

学校の昼休み、自分は弁当を食べることが出来たが、級友のなかには弁当を持たせてもらえない者が居て、教室の外へ出て行った。その様子を見るのは、子供心にも大変辛いことだった。

聞くだけでも悲しい話だが、著者・紹介者は、かかる類の話を経験者から直接聞くことが出来た、最後の世代だと思われる。食べるものが無いことの厳しさを直に聞いた者の一人として、本書の一読を強く勧めたい。